

寺田寅彦

神話と地球物理学





# 神話と地球物理学



われわれのように地球物理学関係の研究に従事しているものが国々の神話などを読む場合に一番気をつくことは、それらの説話の中にその国々の気候風土の特徴が濃厚に印銘されており浸潤していることである。たとえばスカンディナヴィアの神話の中には、温暖な国の住民には到底思いつかれそうもないような、驚くべき氷や雪の現象、あるいはそれを人格化し象徴化したと思われるような描写が織り込まれているのである。

それで、わが国の神話伝説中にも、そういう目で見ると、いかにも日本の国土にふさわしいような自然現象が記述的あるいは象徴的に至るところにちりばめられているのを発見する。

まず第一にこの国が島国であることが神代史の第一ページにおいてすでにきわめて明瞭に表現されている。また、日本海海岸には目立たなくて太平洋岸に顕著なちようせき潮汐の現象を表徴する記事もある。

島が生まれるという記事なども、地球物理学的に解釈すると、海底火山の噴出、あるいは地震による海底の隆

起によって海中に島が現われあるいは暗礁が露出する現象、あるいはまた河口における三角州の出現などを連想させるものがある。

なかんずく速須佐之男命はやすさのおのみことに関する記事の中には火山現

象を如実に連想させるものがはなはだ多い。たとえば「そ

の泣きたもうさまは、青山を枯山からやまなす泣き枯らし、河海うみかわ

はことごとに泣き乾ほしき」というのは、何より適切に噴

火のために草木が枯死し河海うみかわが降灰のために埋められる

ことを連想させる。噴火を地神の慟哭どうこくと見るのは適切な

譬喩ひゆであると言わなければなるまい。「すなわち天あめにま

い上ります時とよに、山川ことごとくにつちに動き、国土皆震ゆりき」  
 とあるのも、普通の地震よりもむしろ特に火山性地震を  
 思わせる。「勝ちさびあまてらすおおみかみに天照大御神の宮田みつくだの畔あはな離ち溝埋みぞう  
 め、また大嘗おおにえきこしめす殿くそに屎くそまり散らしき」というの  
 も噴火による降砂降灰の災害を暗示するようにも見られ  
 る。「その服屋はたやの頂むねをうがちあめて、天あめの斑馬ふちこまを逆剥さかはぎに剥は  
 ぎおとて墮おとし入るる時にうんぬん」というのでも、火口から  
 噴出された石塊が屋をうがって人を殺したということあしはらのなかつくにを  
 暗示する。「すなわち高天原たかまのはら皆暗く、葦原中国あしはらのなかつくにことごと  
 とに闇くらし」というのも、噴煙降灰による天地晦冥かいめいの状を



思わせる。「ここによろず万の神のおとない声は、さばえ狭蠅なす皆わ涌き」  
 は火山鳴動の物すごい心持ちの形容にふさわしい。これ  
 らの記事を日蝕にっしよくに比べる説もあつたようであるが、日  
 蝕のごとき短時間の暗黒状態としては、ここに引用した  
 以外のいろいろな記事が調和しない。神々が鏡や玉を作  
 ったりしてあらゆる方策を講じるといふ顛末てんまつを叙した記  
 事は、ともかくも、相当な長い時間の経過を暗示するか  
 らである。

記紀にはないが、あめのたぢからのおのみこと天手力男命が、引き明けた岩戸を  
 取って投げたのが、虚空はるかにけし飛んでそれが現在

の戸隠山とがくしやまになつたという話も、やはり火山爆発という現象を夢にも知らない人の国には到底成立しにくい説話である。

誤解を防ぐために一言しておかなければならないことは、ここで自分の言おうとしていることは以上の神話が全部地球物理学的現象を人格化した記述であるという意味では決してない。神々の間に起こつたいろいろな事件や葛藤の描写に最もふさわしいものとしてこれらの自然現象の種々相が採用されたものと解釈するほうが穏当であらうと思われるのである。

高志こしの八俣やまたの大蛇おろちの話も火山からふき出す熔岩流の光景を連想させるものである。「年ごとに来て喫くうなる」というのは、噴火の間歇性かんけつせいを暗示する。「それが目は酸漿あかがち」とあるのは、熔岩流の末端の裂罅れつかから内部の灼熱部が隠見する状況の記述にふさわしい。「身一つに頭かしら八つ尾八つあり」は熔岩流が山の谷や沢を求めて合流あるいは分流するさまを暗示する。「またその身に蘿こけまた檜楹ひすぎお生い」というのは熔岩流の表面の峨々ががたる起伏の形容とも見られなくはない。「その長さ谿たに八谷峽たにお八尾やおをわたりて」は、そのままにして解釈はいらない。「その腹

をみれば、ことごとくに常に血爛ただれたりとまおす」は、やはり側面の裂罅からうかがわれる内部の灼熱状態を示唆的にそう言ったものと考えられはない。「八つの門かど」のそれぞれに「酒船さかぶねを置きて」とあるのは、現在でも各地方の沢の下端によくあるような貯水池を連想させる。熔岩流がそれを目がけて沢に沿うておりて来るのは、あたかも大蛇だいじやが酒甕さかがめをねらって来るようにも見られるであろう。

八十神やそがみが大穴牟遲おおなむちの神を欺いて、赤猪あかいだと言ってまっかに焼けた大石を山腹に転落させる話も、やはり火山か

ら噴出された灼熱した大石塊が急斜面を転落する光景を連想させる。

おおくにぬしのかみ

大國主神が海岸に立って憂慮しておられたときに

うなばら

てら

よ

「海を光して依り来る神あり」とあるのは、あるいは

電光、あるいはまたノクチルカのような夜光虫を連想させるが、また一方では、きわめてまれに日本海沿岸でも見られる北光オーロラの現象をも暗示する。

いずもふどき

出雲風土記には、神様が陸地の一片を綱でもそろもそ

ろと引き寄せる話がある。ウエーゲナーの大陸移動説では大陸と大陸、また大陸と島嶼とうしよとの距離は恒同こうどうでなく長

い年月の間にはかなり変化するものと考えられる。それで、この国くに曳びきの神話でも、単に無稽むけいな神仙しんせん譚だんばかりではなくて、何かしらその中に或る事実の胚芽を含んでいられるかもしれないという想像を起こさせるのである。あるいはまた、二つの島の中間の海が漸次に浅くなって交通が容易になったというような事実があつて、それがこういう神話と関連していないとも限らないのである。

神話というものの意義についてはいろいろその道の学者の説があるようであるが、以上引用した若干の例によつてもわかるように、わが国の神話が地球物理学的に見

てもかなりまでわが国にふさわしい真実を含んだものであるということから考えて、その他の人事的な説話の中にも、案外かなり多くの史実あるいは史実の影像が包含されているのではないかという気がする。少なくともそういう仮定を置いた上で従来よりももう少し立ち入った神話の研究をしてもよくはないかと思うのである。

きのうの出来事に関する新聞記事がほとんどうそばかりである場合もある。しかし数千年前の言い伝えの中に貴重な真実が含まれている場合もあるであろう。少なくともわが国民の民族魂といったようなものの由来を研

究する資料としては、万葉集などよりもさらに以上に記紀の神話が重要な地位を占めるものではないかという気がする。

以上はただ一人の地球物理学者の目を通して見た日本神話観に過ぎないのであるが、ここに思うままをしるして読者の教えをこう次第である。

(昭和八年八月、文学)







日本文学電子図書館

---

## 神話と地球物理学

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第四卷  
岩波文庫、岩波書店

昭和41年7月10日 第24刷発行

---



日本文学電子図書館